

岩倉使節団のこと

明治維新の核心は廢藩置県にある。徳川幕府を中央政府とし、二百数十の自立的な諸藩を地方に配して形作られた幕藩体制という多元的システムから、「天皇親政」の中央集権国家への大転換、これが廢藩置県である。藩は解体され府県に再編、派遣された県令が統治の任に当たった。

この転換により、地位と家禄を失った士族は新政への反抗的姿勢を一挙に強めた。後の、佐賀の乱に始まり西南戦争へとつながる日本近代史序盤の最大の政治的危機であった。「廢藩置県ノ詔書」が発せられたのは明治四年七月十四日である。実に呆気に取られるような事実だが、不平士族の反抗心が充満する同じ年の十一月十二日に、岩倉具視を特命全權大使、参議の木戸孝允、大蔵卿の大久保利通、工部大輔の伊藤博文などを副使とする総勢一〇七名からなる「米欧回覧使節団」が横浜を出発。新政府の要人中の要人が明治六年九月までの一年数ヶ月にわたる米英独仏蘭露などの列強回覧の旅に出たのである。ユーラシア大陸の長驅一巡であった。

わたれ ぼしお
渡辺利夫 (拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

幕藩体制は打破したものの、気が付けば新国家の建設構想は何も用意されていない。ならば文明国の文明国たるゆえんを新政府の執行部自身の眼をもつてじっくり観察してこようではないか。実際、使節団の実感を一言でいえば、文明国のもつ文明の圧倒的な力量であった。共和制、憲法、立憲君主制、徴兵制、議会制度、政党政治など文明を支える諸制度を懸命に習得して彼らは帰国した。その後の殖産興業・富国強兵、憲法と議会制度などを躊躇なく実現していったのには、使節団の体得した知恵があったからにちがいない。

人間は自己を他者に映し出すことによってしか自己の何たるかを確認できない。文明国という他者に日本という自己を映し出し、そうして自己の正確な「自画像」を手にしようと指導者は考えたのである。歪みのない自画像なくして明治日本の近代化は不可能であった。極東アジア地政学の大変動の前に、「小事」の政争に明け暮れる者たちよ、自己を鏡に映してみよ。